

日本映画から考察する日本文化[†] —秋田大学における「日本事情」の実践から—

桑本 裕二*

秋田工業高等専門学校

宮本 律子**

秋田大学教育文化学部

本稿は、2004年度から2005年度にかけて秋田大学で実施した日本事情の授業の実践報告である。具体的な実践例として、日本文化理解のために日本映画をDVDを用いて鑑賞し、その全体的なテーマから個々の文化的事項にせまるという手法をとった。様々な文化項目の中から代表的と思われる4項目を挙げ、それぞれについて、映画をストーリー展開の中で考える機会を与えた。この授業の実践を通して、日本事情の授業に対して映像使用、特に映画鑑賞を用いる意義と、今後の秋田大学における日本語教育の中での展望について提言する。

キーワード：日本事情、日本文化、映画のテーマ、ビデオ教材、DVD

1. はじめに

秋田大学の教養教育科目である「日本事情」については、1993年以来、宮本をはじめとする留学生担当教員によって様々な方法で授業が実践されてきた¹⁾。秋田大学における「日本事情」の教授法については、宮本(1995:3)が2通りの考え方を示している。一つは日本語の学習を補う背景知識として日本文化をとらえ、言語教育の一環として教授するものである。これに関しては「日本事情Ⅰ、Ⅱ²⁾」を当て、宮本が担当している。もう一つは日本そのものの知識を教授するものとして従来の一般教育の一科目として捉えるものである。これに対して「日本事情Ⅲ、Ⅳ」を当て、2003年度からは桑本が担当している。

本稿は、桑本担当の「日本事情Ⅲ、Ⅳ」の2004年度後期から2005年度にかけて行ってきた授業につい

ての実践報告である。本授業では、日本文化そのものの知識の教授の手段として日本映画をとり入れた。

「日本事情」への映像導入に関しては、2つのねらいをもって授業実践に臨んだ。一つは映画作品の全体にかかわるテーマの中にならゆる「日本文化」を見だし、それらの特に心理的側面に関して考察を加えるというものである。もう一つは「日本事情Ⅰ、Ⅱ」でもっぱら追究されている文化的背景知識を映像の中の個々の場面から探し出し、考察するものである。本稿はこれらのうちの前者に関して実践をまとめたものである。映像、特に映画の鑑賞を日本事情の授業に導入することの目的を明らかにした上で、2年3期にわたって行ってきたこの方式での授業実践を報告し、本授業における映像導入の意義と今後へ向けての課題を提示する。

後者のねらいに関しては、桑本・宮本(forthcoming)で別途論じている。

2. 映画利用の文化理解

日本語教育への映像使用の導入に関しては、土井(1997)、ラドック(2002)、熊谷(2003)などに支持されている。これらの先行論文は、主に言語教育の

2006年1月18日受理

[†] Japanese Culture in Movies: A Case Study of "Nihonjijo" at Akita University

* Yuji KUWAMOTO, Akita National College of Technology, Akita

** Ritsuko MIYAMOTO, Faculty of Education and Human Studies, Akita University, Akita

補助的役割として映像導入を捉えている。たとえば、土井（1997: 45）は身振り手振りや視線などを伴ったコミュニケーション場面の学習に役立つとしているし、ラドック（2002）はドラマ使用を主に聴覚教育の目的と考えているようである。

現時点では、映像使用を日本文化そのものの教授にあてて捉えている先行事例はきわめて少ない。本授業は文化そのものの教授に対して映像使用を積極的に評価し、実践したものであり、新たな視点による映像使用の試みと位置付けられ、本稿から得られた成果は日本事情の教育方法として意義あるものとして十分に寄与しうることが期待できる。

従来、「日本事情」において日本の文化項目を講義形式で教授することは多く行われてきたことであるが（水谷 1990）、それぞれの文化項目を明確に理解させることにおいて、実際に日常の場面でのどのように根付いていてどのように習慣などに介在しているのかを把握させるのは極めて困難であり、実際にありうる状況として設定されたシチュエーションを映像で提示する手法は、このような文化項目理解には極めて有効な方法であると思われた。加えて、映画作品には、個々の作品に一貫した話の展開があり³⁾、全体を通してのテーマの中にこそ重要な文化項目が潜んでいると考えられる。このように、本実践授業においては、映画作品のテーマに潜む文化的項目に注目し、映画のテーマに則した文化理解を目的のひとつとした。

映像資料として映画を用いたのにはいくつかの理由がある。一つは、それぞれの文化項目が、日常的な場面の中でどのように根付いているのかを確認する必要性を考えた場合、たとえば教育機関などによって制作された文化紹介のビデオよりは、その目的に対してより効果的であると思われる点である（ラドック 2002: 213）。また、コミュニケーション場面を多く含む映像素材として、ストーリー仕立ての教育用ビデオなどの使用の有効性が主張される一方（土井 1997）、より現実的な場面が描かれているものとしては実際のドラマ・映画を用いるべきであると考えられる⁴⁾。しかし、台詞の自然さ、日常性を考えた場合、舞台演劇の台詞は一般に長く（水原 1999: 28）、また、視線や身振り手振り、声の大きさなどが誇張されていて、日常性は薄い。それに比べるとテレビドラマ・映画は台詞も格段に短くなり（水原 1999: 29）、それなりに日常の場面に合致した状況

に近づく。映画はドラマに比べると台詞はより短いことが指摘されている。これは映画の方が作品のテーマに対して映像に依拠する部分が多いせいである（水原 1999: 29）。台詞まわしの自然さ、より日常的な台詞のやりとりという点で考えるならば、テレビドラマこそ目的に沿った映像資料として最もふさわしいものであるといえる。ただし、大学の科目の中で使用するという時間的制約を考えると、テレビドラマは長すぎるというきらいがある。通常のテレビの帯ドラマは1回約1時間、全10～12回で完結するものが多い。1回90分で15回を単位とする大学の授業科目で扱うには分量的にふさわしいとはいえない。作品全体を通しての文化項目を確認するという趣旨からすれば、断片的に使用することは望まれることではないからでもある。

以上の理由により、本授業では映像資料としては日本映画を用いることとした。1期で鑑賞できるのは4～5編ということになる。鑑賞する映画は多様性に富むようにし、日本文化の様々な側面になるべく広範囲に触れられるよう、そのテーマの選択には配慮した。次節以降で、実際の授業の方法、使用映画のテーマの分類、それぞれに基づく授業における考察の実践について述べる。

3. 授業の方法

「日本事情Ⅲ、Ⅳ」は、週1時限（90分）前・後期ごとの開講科目である。1期で全15回の開講となる。第1回の授業でガイダンスを行い、最終の第15回で全体をまとめる。そのため実質的には13回程度の授業となる。

授業は、日本映画を学生に鑑賞させ、それについて担当教員の補足とともに振り返りながら様々な文化的事項について考えるというものである。

実際に鑑賞に使用した映画（アニメーション作品も含む）は4節に挙げたが、これらの鑑賞に2回分の授業を当てた。そしてその次の授業で全体を振り返りながら考察を深めるということをディスカッションの形式を用いながら行った。このように3回の授業を1つの単位としてそれを4～5回行った。

最初の2回は映画鑑賞であるが、4節の映画リストのとおり、大概の作品は全編2時間程度であり、1回90分の授業では、一つの作品の全編を鑑賞することができない。そのため、作品の鑑賞に2回分の

授業を当てたのだが、時間的にゆとりのある分、作品の簡単な説明や、鑑賞の途中で外国人留学生には理解が困難であると思われる言い回しや用語、その他の登場人物のふるまいや物品などを解説することとした。

観賞用の作品は入手可能なかぎり DVD ソフトを用いることとした。これは、DVD ソフトによる画像が磁気ビデオテープに比べて鮮明であることもさることながら、外国人留学生のために聞き取りを補助するための日本語字幕を簡単に設定することができること、また、作品の様々な箇所を瞬時に再生するのが容易なことなど、優れた点が多いことによる。

3 回目の授業は、全体をダイジェストで振り返りながら問題となる箇所を再生し、考察するというものである。その作品の主題となるような広大なテーマから、食事のシーン、祭、家屋の構造など日本文化そのものに関すること、また、登場人物の立ち居振舞いなど、様々なレベルで問題とすべき点があり、それぞれの作品について様々な視点で文化的背景について考察を深めた。この 3 回目の授業の展開は、問題点に関して受講者に問いかけを行って、それをきっかけとしてディスカッションの形式をとる場合や、担当教員がある部分についてコメントを加えるなど、様々な形式で臨んだが、最も重要視したことは、留学生の出身国の諸事情との比較を行って、それがどのように位置付けられるのかについて考えさせたことである。すなわち、桑本・宮本（2005）でも指摘した、双方向的な異文化理解を、この形式の授業でも目指した。

本授業の評価は、レポートによった。これは、授業で鑑賞してきたいずれか 1 作品を選び、それに関連した日本文化に関して論ずるというものである。論文の内容が、できるだけその作品の内容から逸脱しないものとなるよう注意し、A4 用紙 2~3 枚程度の長さにとりまとめさせた。レポートは評価とコメントを付した後、受講者に返却した。

4. 授業の実践

4.1. 鑑賞した作品と選定基準

授業で実際に鑑賞した映画は以下の通りである。

2004年度後期

『男はつらいよ・寅次郎真実一路（第34作）』

（以下『寅34』）

『おもひでぼろぼろ』（アニメーション作品）

（以下『おもひで』）

『釣りバカ日誌 3』（以下『釣りバカ 3』）

『釣りバカ日誌 9』（以下『釣りバカ 9』）

『世界の中心で、愛をさけぶ』（以下『世界中』）

2005年度前期

『男はつらいよ・花も嵐も寅次郎（第30作）』（以下『寅30』）

『Shall we ダンス?』（以下『ダンス』）

『SWING GIRLS』（以下『SG』）

『さびしんぼう』（以下『さびしんぼう』）

2005年度後期（本稿提出時継続中）

『男はつらいよ・拝啓車寅次郎様（第47作）』（以下『寅47』）

『マルサの女 2』（以下『マルサ』）

『世界中』

鑑賞する映画の選定に関しては、以下の点を考慮した。

- (1) 長さは90分~150分程度
- (2) 場面設定は現代のものとする。
- (3) できるだけ日常に即した場面設定

(1) に関しては、授業時間、準備にかかる時間の制約などによる。また、3時間（180分）を超えるような大作は、全体的に理解するのも部分を取り出すのもかなりの困難が考えられたためでもある。

(2) に関しては、本稿での実践授業の目標を現代日本の文化理解に置きたかったからで、時代劇や、前時代的な設定はふさわしくないと考えた。

(3) に関しても上記と同様で、現代の、そしてごくりありふれた日常に潜む文化的項目に注目したいというコンセプトに基づいている。そのため、SF 小説的なもの、その他設定が現実離れしすぎているものは鑑賞の対象にしないことにした。

4.2. 使用した映画作品のテーマによる分類

4.2.0.

本授業では、鑑賞した映画作品に対して、それらのもつテーマに注目し、映画作品全体から感じられる心理的文化項目を分析した。授業に際して映画を使用するにあたっては、必ずしもそれぞれの映画作品に関して芸術的価値を見だし、文学的鑑賞を行うことを目的としていたわけではない。会話の日常性ということに着目するならば、優れた文学作品の映画化されたものなどはむしろふさわしいものではなく、逆に二流、三流と目される作品にこそ、それらしい日常性が潜んでいるとされる程である（水原1999: 31）。

筆者は本授業を実践するにあたり、1期で鑑賞する作品のテーマができるだけ多様性に富むよう配慮した。

筆者がそれぞれの映画作品の中に求めた作品全体を通してのテーマはおおよそ次の4項目にまとめることができる。

- A. 恋愛と日常
- B. 仕事と日常
- C. 青春時代の純愛
- D. 社会問題との関連

実際に授業で使用した映画に関しては、おおよそ次のように分類される。

- A. 『寅30/34/47』『おもひで』『ダンス』
- B. 『釣りバカ 3/9』『ダンス』『寅30/34』『おもひで』
- C. 『世界中』『SG』『さびしんぼう』
- D. 『マルサ』『おもひで』

これら A～D の各項目に対しては、日本文化の側面から考察すべき点がそれぞれ挙げられる。それらについては本授業の実践では、それぞれの映画鑑賞の3回目の授業において、担当教員による講義、また、受講生への問いかけを発端とした考察、討論によって考察・分析を行っている。以下で各項目ごとにまとめる。

4.2.1. 恋愛と日常

恋愛は、映画のテーマとしては最も多く描かれるものの一つで、実践授業で扱ったほとんどの作品に

直接的、間接的に現れた描写である。対人関係、内面的心理に深く根ざした項目であるといえ、映画の中の登場人物の行動や発話、心理描写などには、日本文化のオリジナリティーが反映している。特に、見合い、結婚などの捉え方、描き方からは含蓄に富む考察が得られた。さらに、それらの恋愛心理が、いかに日常に介在するのかという点に注目することにより、それらのもつ文化的背景を知ることができる。

『男はつらいよ』の各作品は、恋愛感情や恋愛意識がどのように日常に現れるかについて実に如実に描写していると思われる。主人公の車寅次郎は、定職に就かないで旅回りをしている風来坊であり、非日常の権化であるといえる。彼は、恋愛に関しては満たされないでいて、いつも失敗を繰り返しているが、その分、純粋で一途な愛を理想としている。それは、好きな人に対して素直に好きと言えない奥ゆかしさのゆえに実行を伴わず、いつまでも理想の状態が保たれているためとも考えられる。そのような中で、寅次郎は、旅先で普通に暮らす人々に会い、また、ふらりと実家である団子屋に帰り、日常を忙しく暮らす身内に再会する。これらの人々の中で、時々、夫婦間の恋愛感情、恋人同士の微妙な心理などが、照れや忙しさとともに日常の中に埋没し、それに対する彼らの悩んだり困ったりする姿が非日常の権化である寅次郎の目を通して描かれる。

純粋であってほしい恋愛感情を、多忙で無味乾燥な日常の中にいかに表出させるかということがこの映画の本質であるといえるが、このような描写を通じて日本文化の中での恋愛感情の位置づけを確認できる。そして、日本人と恋愛ということに関して、照れ隠し、奥ゆかしさという側面から、具体的にどのような言動を伴うのかということを理解することができるのである。

『寅30』は、寅次郎が旅先であったデパート店員蛸子と動物園の飼育係である三郎の恋愛を手助けする物語である。女性と話をすることが苦手な三郎の姿と、蛸子の仕事や現状の実家の両親との生活の中で結婚について思い悩む描写は、そのまま一般的な日本人の恋愛観、結婚観の一例となっている。この作品の中で、蛸子の家族が見合いの話を進めている場面がある。同様の例として『おもひで』にも「見合い話を断った」という状況が挿話として描かれているが、このような見合いの話題がいかに日常会話

に現れるかということで、結婚制度の一側面としての「見合い」の位置づけを確認できる。

『寅34』『寅47』の中心的な話題は、熟年夫婦のあり方である。『寅34』では、マイホーム購入と引き替えに長距離通勤を強いられる熱血サラリーマンと専業主婦であるその妻を描き、愛情を感じていながらもともにじっくり時を過ごすことのできないディレンマが、主人の失踪という形で具現している。『ダンス』では、同様の状況が描かれているが、主人公の課長が社交ダンスの趣味を始めたことで妻が不倫を疑い、苦悩する姿が描かれる。この映画でも、もともと確認しないまでも潜在的に感じている愛情を、不倫を疑うという形でしか表現できないもどかしさを感じられる。『寅47』では、旅先でけがをした休暇中の主婦をその主人が心配して迎えに来る。接待のゴルフを断ってわざわざ来た、という状況があることから、会社員としてはかなりの地位があることが推測できるが、鎌倉に持ち家があり、娘も順調に育っている状況で、つかの間の休暇を楽しむ主婦は日常に倦怠を感じているのか、わざわざ迎えに来た主人の迷惑そうな態度は妻や家庭に愛情を感じていないのか、逆にわざわざ来たことは十分に大切に思っているからなのか、様々な状況が推測できるが、日常の幸せの中で埋没してしまっている夫婦間の愛情の複雑な現れ方がこのような場面設定の中に巧妙に展開していると思われる。

4.2.2. 仕事と日常

職場そのものが場面として設定される作品を通して、日本文化の中での職業のあり方、その周囲で、とりわけ家庭における仕事の位置付けを映像とともに具体的に知ることができる。

『釣りバカ日誌』は1988年より現在までほぼ毎年制作されているシリーズものであるが、主人公浜崎伝助（浜ちゃん）の職場である建設会社の営業課のオフィスが主要な舞台となって物語が進行するため、典型的な日本社会の会社の様子、たとえば上司、同僚との人間関係、仕事の進め方などを理解するには格好の教材であるといえる。また、ここ10数年ほぼ毎年制作されていることから、それぞれの時代の世相を、建設会社の立場から確認できる。さらに、日本社会の典型であると考えられる「たてまえ」も随所にみられるが、浜ちゃんの自由奔放な公私を分けないふるまいによって「たてまえ」というものの無

意味さや、逆に場面に応じた重要さが皮肉っぽく描かれている（桑本・宮本 forthcoming: p.6）。

『寅34』では寅次郎が焼鳥屋で知り合った会社の課長らしき男とその家庭が描かれている。彼は証券会社の重鎮であり、念願のマイホームは電車でかなり時間のかかるところにあって、家を出かけるのは朝早く、帰宅は深夜近くという毎日で、家庭でゆっくり妻や息子と過ごす時間がない。この描写は、仕事熱心で家庭を犠牲にして一家を支える典型的な日本のサラリーマンの姿を伝えている。持ち家もありそれなりに裕福で仕事も順調で、見たところ幸せな家庭ではあるが、その裏に家族団欒の犠牲があり、課長のノイローゼによる失踪をきっかけに家族団欒を取り戻すことで、家族の幸せとは何かを考えさせられる展開となっている。これには貧しいながらも楽しい寅次郎の実家の団子屋「とらや」での夕食風景が対極にある。『ダンス』も同様に主人公の課長の遠距離通勤が描かれている。こちらの作品では遠距離通勤の不自由さや時間のなさから来る空虚さが、社交ダンスの趣味に向かうきっかけとなって描かれている。

『おもひで』では、主人公のOLタエ子が、「ただ何となく選んだ」現在の職業に対して、休暇を利用した田舎での生活の中で罪悪感を感じつつ農家の嫁になることを真剣に考えることを彷彿させる描写で全体がまとめられている（桑本・宮本 forthcoming: p.8）。独身女性にとっての、仕事か結婚か、結婚後に仕事を続けるかといった選択を迫られる描写は、そのまま現在の日本社会を映し出している。仕事と結婚の狭間で揺れ動く心理描写は『寅30』にも登場する。

4.2.3. 青春時代の純愛

4.1.1. 節では結婚や見合いなどの、実質を伴った、または、日々の生活の中で隠されるように描かれる恋愛について言及したが、青春映画においては、中心的な登場人物が高校生などの非社会人であり、恋愛が、家庭での日常生活や、その後の人生に対する責任などから逸脱していて、非常に純粋な形をとって焦点化されるため、そのような描写を通じて恋愛事情そのものについて深く考察することができる。純愛に関しては『男はつらいよ』における寅次郎の非日常的なものの考え方による理想の恋愛観からも知ることができるが、青春映画からは、登場人物た

ちの若さゆえの失敗、苦悩、歓喜が描かれ、かれらの感情表現を交えた恋愛の姿にも触れながらその純粋な側面を知ることができる。

これまで授業で扱った映画の中では『世界中』が理想的で感情表現がむき出しの純愛をもっとも純粋に描いていると思われる。『世界中』は、主人公がふとしたきっかけで高校時代に白血病で死んでいった恋人との思い出を求めて故郷の町をさまようという内容のものである。作品の場面は、現代と17年前の高校時代が思い出とともに錯綜しているが、基本的には高校時代の学校の構内や帰り道など、10代後半の若者にまつわる風物が描かれている。

物語は、女子高生亜紀の病気によって衰えていく様子とともに、通常は起こりえないような激しさで恋愛が進行するので、通常の若者の恋愛事情を把握する上では、この部分は多少考慮されなければならない。たとえば、亜紀が朔太郎（サク）に向かって「好きよ」と言う場面があるが、面と向かって愛を表現することは日本社会においては通常まれである。若者の恋愛事情を知る上で注目すべき箇所は、学園の中での授業の合間の廊下、下校途中の帰り道、放課後の友人同士の会話などの、高校生にとっての日常の場面である。『世界中』の中にはこのような場面が随所にみられ、そのそれぞれについて恋愛やその他の若者の行動に関する背景的狀況を確認できることになる。

亜紀とサクは、ラジオ番組からの賞品である当時流行のウォークマンを介してカセットテープの吹き込みによるメッセージの交換を行うことで愛を確かめ合う。その方法には、現代の若者の携帯電話によるコミュニケーションからすれば隔世の感を持たずにはいられないが、その話題の内容は、ありふれた恋愛事情を表しており、それは、現代にも通ずるものとして捉えることも可能である。たとえば、カセットテープの交換メッセージとしてサクが初めに吹き込んだのは、「コロッケには醤油をかけるかソースをかけるか」について問いかけるというものであったが、とりあえずどうでもいいことを話題に出すということから愛情を感じている者に対する照れの気持ちは表わされている⁷⁾。また、好きな食べ物・もの・映画などを列挙しあうところに、その一つずつの項目に若者の嗜好が表され⁸⁾、それによって興味や好みを共有することで愛情を確かめ合っている様子がわかる。

『さびしんぼう』(1985年)を鑑賞する映画として扱ったのは、『世界中』の設定された時代(1986年)とはほぼ同時期に、「現代の」ものとして制作された映画の描写を比較することで、実際の風俗の時代的変遷を確認するという意図があった⁷⁾。『さびしんぼう』も同じく高校生の純愛(憧れの恋)を描いているが、女子校を遠くカメラの望遠レンズを使って眺めたり、自転車のチェーンがはずれていることをきっかけに意中の女の子に声をかけたりというのは、野暮ったい、前時代的な若者の純愛の表現であると思われるが、『世界中』の場合の亜紀とサクの気さくな接近の仕方と比べることで、同じ時代を描いているはずなのに、制作された20年の時の隔たりを意識することができ、日本文化における恋愛観の微妙な時代的変遷を確認できるのである。

『SG』は、『世界中』と違って映画のテーマにシリアスな面がなく、軽妙で愉快に物語が進行する。そして、登場する女子高校生たちの明るいふるまいや快活な行動の中で軽快に恋愛めいたものが描かれるが、ジャズバンドに唯一男子生徒として参加している拓雄の、主人公友子に対する片思い風の思いの寄せ方がコミカルに描かれている。これは『世界中』や『さびしんぼう』における恋愛の描写とは対局的であるが、このように様々な形態の場面設定からいろいろな恋愛事情を確認できる。

4.2.4. 社会問題との関連

日本の社会構造について知識を深めることは、「日本事情」の本来の目的に沿うものであるといえ、映像の中でそれらの社会構造を紹介し、加えてそれらの社会的象徴と人々の日常生活などとの関係を捉えることは、講義形式で知識を教授するより効果的な教授法であると考えられる。2004年度後期に映像使用の授業形式を導入してからははじめのうちは、日本語学習の途上にある留学生に対して、日本語の聞き取りを強化するという語学学習の延長という側面も併せ持つ「日本事情」の授業にあって、込み入った内容の社会問題を正しく理解し、考察を深めるのは相当な困難が予想されたので、社会問題を扱ったテーマものは極力避けるようにしていた。そのうち、学生の評価レポートの中に、『ダンス』について、探偵を雇って主人の素行の調査を依頼する場面に興味をもった内容の記述があったり、他にも社会的な問題にも学生に興味をもたれていることがわかって

きたので、社会的な問題に踏み込んだ内容の映画も扱うことにした。

社会問題を主に取り扱った内容の映画として『マルサの女2』を挙げることができる。この映画は、国税局査察部（通称「マルサ」）を舞台に、査察官の板倉亮子を主人公に脱税を取り締まる物語である。主に脱税を扱った第1作の続編として、地上げや新興宗教の組織、政治、財界の不正行為が描かれ、日本社会を裏側から捉えている。政治や経済の構造について裏側からという変則的なアプローチではあるが、映像とともに概観し、社会全体に対する様々な影響について知る機会を提供する。少し前時代的になるが、バブル崩壊以前の建築業界の「地上げ」の実態、確固たる信仰を持たないと考えられている日本人にとっての新興宗教のあり方などが赤裸々に描写されている。また、やくざ組織、ホームレス、飽食など、現代日本社会の負の側面も如実に描かれている。授業で扱うにあたって、留学生の日本語学習進度によっては、使われている日本語が難しく、発話も物語の進行も速度が速く、理解が困難な学生もいたようだったが、様々なテーマの映画を観るという活動の中で選択肢の一つとして社会問題のテーマの作品を扱うことは意義があったと思う。

『おもひで』は農業の将来という別の種類の社会問題に触れていた。主人公のOLタエ子は、都会での会社勤めの生活を「ただ何となく」続けて飽き飽きしているところへ田舎での農作業に刺激を求めて姉の嫁ぎ先の農家へ遊びに行く。その中で脱サラをして有機農業に取り組む青年に会ったり、その青年の嫁の候補としてタエ子の名を挙げる親戚筋がいたり、日本の農村における人材不足、後継者問題などを直接的に描写している。この映画（アニメーション作品）の時代設定は1980年代の半ば頃だが、農業問題は現代にもつながる代表的な社会的問題であるといえる。農業従事者と一般社会、あるいは、地方都市における都会の生活への憧れなどを具体的に描写している作品であるといえる。

5. おわりに

以上述べてきたように、1年半にわたって行ってきた「日本事情」において、筆者は映像使用、特に映画鑑賞を通して日本文化を教授する試みを実践してきた。映像使用を文化理解に利用することの主要

な意義は、それぞれの文化項目が、視覚的に示されることで理解を助けるということであろう。また、文化紹介のビデオなどと違って、ストーリーの展開とともにそれぞれの文化項目が確認でき、日常の流れの中でそれらを把握することができるという長所を併せ持つ。筆者は4.2.で主に4種類のテーマによって映画を大別し、それぞれから知ることのできる文化項目を整理して、映画鑑賞とともに指摘、解説した。このことにより、1期の受講を通して多様性に富む様々な文化項目について解説することができ、同一のテーマが複数の映画にわたっていることもあって、様々な状況に応じて様々な捉え方がなされる文化項目を受講学生に認識させることができた。

今後の本授業の展望についていえば、さらに多様なテーマを探し出し、提示することではないかと思われる。たとえば、4.2.で“D”に分類した社会問題は、当初は扱わなかったが、学生の評価レポートの記述を参考にして後で採用したものであった。レポートや、その他の学生の意見も参考にしながら要望や感想に対応しながら、外国人留学生たちがどのような日本文化を知りたいかを知りながら改善していかなければならない。また、老人介護や年金などを含む高齢化問題、教育現場や経済、犯罪に関する新しい社会問題も発生しつつある今、これらに柔軟に対応しつつ教材の映画選択を行う必要がある。

本授業の方法に関しては、たとえば、4.2.のA～Dの分類のうち、どれか1項目に絞って、それを多数の映画から抜き出して鑑賞し、比較検討するという方法も今後考慮されてもよい。そうなれば、台詞回しや状況設定がより日常的なものに近づくことされるテレビドラマを教材として使用する余地もできるだろう。そのような場合に、同一の事象に対する互いに解釈の異なる見解が2つの映画に展開したような場合、それらを対照させる映像使用は、極めて斬新な手法であると考えられる。すなわち、「この国（日本）の文化とはこういうものだ」という固定観念ではなく、時代や状況により、様々な捉え方が内部的にもなされるということを理解することで、柔軟な文化理解を可能にするからである。

本稿をまとめるにあたり、佐藤直人、佐藤雅彦の両氏には有益な助言を頂きました。感謝申し上げます。

注

- 1) これまでの秋田大学における「日本事情」の実践は、宮本（1995）、宮本他（1998）、宮本・松岡（1999）、桑本・宮本（2005）などで報告済みである。
- 2) Iが前期開講科目、IIが後期開講科目である。以下のIII、IVはそれぞれ前期・後期開講科目である。
- 3) ドラマ・映画の話題の展開の類型に関しては甲田（2003）を参照。
- 4) 土井（1997:注2）では、テレビ番組の教材としての使用には法規上の問題があるらしいとの指摘がある。
- 5) 桑本・宮本（forthcoming: p.7）では同一の箇所に関して、食文化の中で、「醤油」「ソース（卓上の市販のもの）」のあり方について指摘した。
- 6) 好きな食べ物：（亜紀）湯豆腐、メープルシロップ、ノリに醤油をつけて食べる白いご飯（サク）餃子、宇治金時、オムライス／好きなもの：（亜紀）調理実習、夏の麦茶、白のワンピース、美容室のにおい（サク）プールの授業、冬のクワガタムシ、牛乳瓶のふた、放課後のチャイム
- 7) 4.1.の一覧表のとおり、同一授業でこれら2つの映画を同時には使用していないが、20年近い時間の間の風俗の変遷を感じてほしいという担当教員の意図はいずれかの作品だけでも込められている。

使用映画資料

- 『男はつらいよ・花も嵐も寅次郎（第30作）』
山田洋次監督，1982年，松竹（106分）
- 『男はつらいよ・寅次郎真実一路（第34作）』
山田洋次監督，1984年，松竹（105分）
- 『男はつらいよ・拝啓車寅次郎様（第47作）』
山田洋次監督，1994年，松竹（101分）
- 『おもひでばろばろ』
高畑勲監督，1991年，スタジオジブリ（119分）
- 『さびしんぼう』
大林宣彦監督，1985年，東宝（110分）
- 『SWING GIRLS』
矢口史靖監督，2004年，東宝（105分）

『Shall we ダンス?』

周防正行監督，1996年，大映・日本テレビ放送網（136分）

『世界の中心で、愛をさけぶ』

行定勲監督，2004年，東宝・TBS（138分）

『釣りバカ日誌3』

栗山富夫監督，1990年，松竹（96分）

『釣りバカ日誌9』

栗山富夫監督，1997年，松竹（115分）

『マルサの女2』

伊丹十三監督，1988年，伊丹プロダクション（128分）

参考文献

- 熊谷智子（2003）「シナリオのある会話ードラマの日本語の特徴－」『日本語学』第22巻第2号，6-14.
- 桑本裕二・宮本律子（2005）「双方向型異文化理解の試みとしての「日本事情」」『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』第27号，87-95.
- 桑本裕二・宮本律子（forthcoming）「背景知識の教授をめざした「日本事情」への映像使用」『秋田大学教養基礎教育研究年報』第8号，11p.
- 甲田直美（2003）「ドラマに見られる話題の展開と構成」『日本語学』第22巻第2号，34-42.
- 土井真美（1997）「映像素材の教材としての利用の可能性－話しことば教育のための学習項目抽出－」『日本語学』第16巻第9号，42-50.
- 水谷修（1990）「日本事情とは何か」『言語』第19巻第10号，22-27.
- 水原明人（1999）「作る談話・脚本制作の現場」『日本語学』第18巻第11号，28-39.
- 宮本律子（1995）「「日本事情」をどう教えるか－秋田大学における実践報告(1)－」『秋田大学教育文化学部教育工学研究報告』第17号，1-11.
- 宮本律子・村上東・日高水穂・中村裕・本間恵子・小林綾枝（1998）「「日本事情」をどう教えるか秋田大学における実践報告(2)－リレー式による日本事情講義の試み－」『秋田大学総合基礎教育研究紀要』第5集，73-86.
- 宮本律子・松岡洋子（1999）「「日本事情」のオリエンテーション教育としての意義－複数の授業形態の実践を通じて－」『秋田大学教育文化学部教

育実践研究紀要』第21号, 63-71.

ラドック, カレン (2002) 「聴解教育・文化学習のためのドラマ使用」『ヨーロッパ日本語教育』no. 7, 213-220.

Summary

This is a case study of Japanese Affairs courses "Nihonjijo" held at Akita University in 2004 and 2005. In the courses, we had students watch Japanese movies (if possible, by DVD) and then think about some Japanese cultural items. We took four items including love affairs or business matters among various kinds of Japanese

cultural themes of the movies. We suggest the importance of using movies as audio-visual materials for Japanese affairs and the future prospect of this kind of teaching Japanese culture in Japanese language education at Akita University.

Key Words : Japanese Affairs, Japanese Culture, Theme of a Movie, Audio-Visual Materials, DVD Movies

(Received January 18, 2006)